

「歴史遺産と都市文化創造 世界から大阪へ」

はじめに

最初に、共同研究の趣旨と本報告書刊行までの経過を簡単に記しておきます。

21世紀COEプログラムの研究拠点「都市文化研究センター」では、2002年10月の設立以来、3つの研究教育チームを編成し、「都市文化創造のための人文科学的研究」を推進してきました。うち「比較都市文化史」を分担研究課題とするAチームは、歴史的な側面から都市文化の研究を進めていますが、2003年度には、都市のもつ歴史遺産を現代都市づくりにどのように生かすのかという、現代的な課題にも取り組むことにしました。

こうして結成されたサブチーム「歴史遺産と都市文化創造」では、次のような具体的な研究計画を立て、2003年2月のセンター会議で了承を得ました。

- 1) 立地条件、歴史的背景等の点で大阪市と類似した特徴をもつ海外都市を選び、それらの都市において、歴史的な文化遺産がどのように現代の都市文化創造に生かされているのかを現地調査する。
- 2) 各調査の成果を持ち寄ってAチームの研究会で報告し、歴史遺産と都市文化創造との関連について包括的に検討する。その際には、研究拠点の所在地である大阪市の都市文化創造にどのように寄与できるか、という課題に留意する。
- 3) 研究の成果を報告書としてまとめ、都市文化研究者はいうまでもなく、大阪市をはじめとする自治体関係機関にも配布して、都市文化創造へ向けての問題提起を行なう。

当初の計画では、2003年度中にアジア・ヨーロッパの各都市について調査する予定でしたが、ご承知のように、SARSによる渡航制限のため、中国・東南アジアの都市の調査は

実施が困難になりました。そこで 2003 年 6 月の段階で研究計画を一部修正し、アジア都市の調査は 2004 年度以降に延期することとして、2003 年度は調査対象を欧米の 3 都市に絞りました。

修正計画に従って、8 月末から 10 月初めにかけて、3 名の分担研究者（COE 事業推進担当者・同協力者）が、以下のような要領で現地調査を行ないました。

トリエステ（イタリア）——松村國隆、調査期間 9 月 1 日～10 日

イスタンブル（トルコ） 井上浩一、調査期間 8 月 30 日～ 9 月 6 日

バンクーバー（カナダ） 中野耕太郎、調査期間 9 月 22 日～10 月 5 日

これらの都市を調査対象に選んだ理由は、いずれも大阪と同じく、ヒト・モノ・情報が集まる港湾都市として、豊かな文化を生み出してきた歴史都市だからです。トリエステは内陸国家ハプスブルク・オーストリア帝国の世界への窓でした。東洋と西洋が出会う海峡の街イスタンブルは、ビザンツ帝国そしてオスマン・トルコ帝国の都であり、バンクーバーは太平洋に面した港町としてアジアともつながる国際都市です。

現地調査の報告は、2003 年 10 月 25 日の A チーム第 13 回研究会において行なわれることになりました。A チームではこの研究会をいっそう実りあるものにするため、上記 3 名の現地調査報告に加えて、関連報告やコメントも頂くことにしました。その結果、第 13 回研究会はミニ・シンポジウムという形式をとった充実したものとなりました。

関連報告は、日本中世都市の専門家である仁木宏氏（COE 事業推進担当者）にお願いしました。仁木氏は、2002 年度の COE 事業の一環として、ハンブルクを中心とするドイツ中世・近世都市の調査を行っており、その成果はすでに 2003 年 6 月 12 日の A チーム第 10 回研究会でも報告されていますが、あらためて港湾遺跡の現状に焦点を当てつつ、フランスやイタリアも含めたヨーロッパと日本の比較をしてもらいました。また COE 研究員エヴァ・カミンスキ氏（ハンブルク大学アジアアフリカ研究所日本学科）には、コメントというかたちで、大阪の姉妹都市である港町ハンブルクの文化遺産についての報告をお願いしました。

当日は 20 名の参加者があり、予定の時間を越えて、報告・質疑・意見交換が行なわれました。多岐にわたった議論のうち、ここで挙げておきたいのは博物館をめぐる問題です。ハンブルク工芸博物館の歴史と現状に関するカミンスキ氏のコメントをきっかけとして展

開された討論は、仁木氏の関連報告も含めて、四つの報告がそれぞれ博物館について触れていたこともあって、とても活発なものとなりました。私たちの共同研究のテーマ「歴史遺産と都市文化創造」にとって博物館がもつ重要性を確認できたことは、来年度以降の調査・研究にひとつの指針を与えたものと思います。大阪市には大阪歴史博物館という立派な施設があり、大阪の歴史に関する充実した展示もなされています。都市文化創造と博物館という問題は、大阪にとっても重要なものとなるでしょう。

本報告書は2003年10月25日のAチーム第13回研究会(ミニ・シンポジウム)をまとめたものです。残念ながら紙数等の都合で、討論の記録は収録できませんでしたが、各執筆者にお願いして、質疑・意見交換での発言も適宜原稿に盛り込んでもらいました。それゆえ、各報告・コメントとも、ミニ・シンポジウムでの口頭報告をもとにしてはいますが、若干の加筆修正がなされていることをお断りしておきます。

報告書をまとめる段階で、来年度に予定しているアジア諸都市の調査に向けての準備を兼ねて、もう1篇コメントを追加することにしました。山崎覚士氏(COE若手研究員)の寧波・杭州の調査報告です。山崎氏は、SARSによる渡航制限の解除を待って、9月2日から6ヶ月間の予定で上海サブセンターにおいて研究活動を行なっています。当然、第13回研究会(ミニ・シンポジウム)には出席してもらえませんが、2003年10月の現地視察の記録を写真とともに送ってもらい、コメント2として掲載しました。

お読みいただければおわかりのように、ここに収録しました4本の報告、2本のコメントには、いずれも大阪の都市文化創造に向けての問題提起がこめられています。私たちの共同研究はまだ始まったばかりで、本報告書も中間報告という性格のものです。しかし2004年度には、本年度の成果をふまえ、アジア都市の本格的な調査も加えて、包括的な成果報告書をまとめる予定をしています。それは、COE研究プログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」の目的にふさわしい研究成果となるだろうと、私たちは考えています。御意見、御批判をいただければ幸いです。

2003年12月

井上浩一